

川あじろ



第 123 号

2025 年 1 月
日本野鳥の会三重 <http://miebird.org/>

チュウヒサミット 2024 開催される



津市 平井 正志

チュウヒサミットとは

第1回のチュウヒサミットは2006年、名古屋市内で開かれた。当時、木曾岬干拓地は堤防で木曾川河口の干潟を仕切り、ポンプで排水しただけの土地で、海面よりも低く、木が生育せず、雑草とヨシの草地であり、チュウヒの複数つがいが繁殖していた。また、ねぐらも確認され、2002年12月の調査ではチュウヒ27羽、ハイイロチュウヒ6羽、コチョウゲンボウ44羽と多数のねぐら入りを記録していた。これら3種はいずれも地面で寝るタカである。しかし、干拓地北側では土砂が入れられ、埋め立て工事が始まっていた。この木曾岬干拓地の環境をなんとかして守ることができないか、また他の繁殖地の状況を知りたいと全国のチュウヒ研究者に集まってもらった。この第1回サミットでは北海道苫小牧付近、青森仏沼、および石川県河北潟での繁殖状況が報告された。それ以降チュウヒサミットは続けられた。

今回のサミット

今回のチュウヒサミットは2024年11月16日、名古屋で開催された。今回で5回目であるが、前回は2017年なので、なんと7年ぶりである。この間、コロナのためだけではなく、開催の準備が十分に行えず、のびのびになっていた。会場の名古屋、愛知学院大学名城公園キャンパスのキャッスルホールには北海道から岡山まで87名の参加者が集まった。財団日本野鳥の会の浦達也氏から全国での繁殖数調査の結果が報告され、135つがいが繁殖とされた。しかし大半が北海道で、サロベツ原野付近で57つがいが、道央の勇払原野周辺で20つがいであった。本州ではわずか19つがいであった(2018年から2020年の調査)。また、その後も減り続けていると報告された。

この間、チュウヒは環境省により国内希少野生動物植物種に指定された。指定されたことで、開発などに際し、注目されるようになったが、自動的に保護されるわけではない。営巣地やその付近の開発、太陽光発電設置、風車建設はその後に進んでいる。

目次

チュウヒサミット 2024 開催される	2
表紙の言葉	2
タカの渡り 2024 年	4
背割り堤のオオハヤブサ	6
トモエガモ	8
ホームページの新旧入れ替えと 新しい野鳥記録報告など	10
「日本鳥類目録」改訂第8版が発行されました	11
野鳥記録	14
LINE から記録へ	18
推し一枚 セイタカシギ	19
「シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化」 出版のお知らせ	
～本の出版と特別価格での購入について～	20
4 県合同探鳥会 岐阜河川環境楽園オアシスパーク	21
事務局だより	21
理事会報告	22
探鳥会予告 (2025 年 1 月～3 月)	23
探鳥会報告 (2024 年 7 月～2024 年 11 月)	24
編集後記	28

表紙の言葉

小鳥の集まる木

松阪市 小野 新子

我々が、月に一度野鳥観察をしている林に小鳥たちが集まる木がある。ハゼかヌルデか未だ確かめていないがウルシ科の木であることは確かだ。房になった木の実の小鳥たちの大好物。ロウが採れる実は、虫が少ない冬場の彼らのエネルギー源なのかも知れない。メジロ、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒガラ、コゲラ、アオゲラも仲間に入って賑やかだ。

我々がおしゃべりに夢中になっている時は、小鳥たちもチルチル ピチピチにぎやかだが、ひとたび彼らに双眼鏡を向けると小鳥たちのおしゃべりはピタリと止まる。どちらが観察されているのやら・・・木漏れ日の下の楽しいひと時である。

北海道の米川洋氏からは北海道のチュウヒ繁殖の状況が報告された、注目されたのはオジロワシによる繁殖妨害である。オジロワシはサケなどの魚を食べる海ワシで、山地で繁殖するイヌワシなどとは異なり、もともと温かな性格と言われていたが、近年北海道での繁殖数が急増し、かつ、カモだけでなく、チュウヒも襲うようになったと報告された。予稿集にはオジロワシが捕らえたチュウヒを運び去るショッキングな写真が掲載された。また、外来生物のアライグマが増加しており、チュウヒの繁殖にも影響が出ているとのことであった。単に開発を止めれば良いという問題だけではなさそうである。

木曾岬干拓地では2019年に最後のヒナが巣立った以降、繁殖は成功していない。中部地方最大の繁殖地、石川県河北潟では近年ヨシ原の衰退、カメラマンの影響などで繁殖が困難になっていて、10つがい程度の繁殖になっている。その他、愛知県西尾市、滋賀県、北九州市から報告があったが、いずれも安定した繁殖地とはなりえない状況であると思われた。また、以前繁殖が報告されていた、青森県仏沼や秋田県八郎潟からの報告はなかった。多田英行氏からは越冬地、ねぐらの問題点が提起され、これらの地の開発のみならず、自然遷移、カメラマンの影響など多方面にわたる問題点が指摘された。閉会后、場所を移して、懇親会が開かれ、種々、保護について、開発について意見が戦わされた。

今後のサミット

今回のサミットは開催地元の野鳥の会愛知県支部会員の方々がみごとな連携で会場の確保、設定などを担当してくださり、会議はスムーズにかつ有意義に進んだ。それに比べると、当会、野鳥の会三重会員の働きはやや微力であったようだ。しかし、財団日本野鳥の会からの資金援助があったとはいえ、愛知、三重のたった2つの団体の主催で全国大会が開催できたことは、評価されるべきであろうし、今後も継続していかなければならないであろう。また、もっと多くの会員が平地で繁殖するタカ、チュウヒに関心を持ってほしいものである。



上：発表する当会
近藤代表
下：会場風景



三重県では有志により各地でタカの渡り観察が行われています。野鳥の会三重ではいなべ市北勢町と岐阜県海津町の県境付近にある「庭田山」と伊勢市にある「やすらぎ公園」で渡り観察が10日前後行われています。また飯高町の高見峠でもタカの渡り探鳥会が開かれました。

今年のタカの渡りの傾向としては全国的に例年になく猛暑だったため9月上旬でも高温状態が続いていました。そのため渡りの数が極端に少なく、中旬まで一向に数が増える気配がありませんでした。

それでも9月22日から23日にかけて本州を前線が通過し気温が一気に下がったことで渡りが活発になり、長野県白樺峠では23日から25日にかけて1,000羽以上のサシバが渡っていき、24日にサシバ5,100羽が渡りピークを迎えました。一方、太平洋側の伊良湖岬では28日の雨の後、また気温が下がったことで10月1日から2日にかけて400羽以上が通過。10月10日にサシバ



渡りのサシバ

1,400羽が通過しピークを迎えました。

三重県での観察では内陸にある庭田山で23日から24日にかけてピークを迎え、24日には41羽のサシバが渡りました。また太平洋側の伊勢・やすらぎ公園では10日から11日かけてピークを迎え11日にはサシバ125羽が渡りました。

このように今年は中々気温が下がらなかったため、渡りの鳥たちも移動が遅れているようでした。それでも雨が降って気温が下がった翌日には多くのタカの渡りが観察できました。特に今年は分散せずに、まとめて一気に渡っていった印象です。毎年、夏は酷暑と言われて久しいですが渡りのピークを予測するのが年々難しくなっていると感じます。

参考：タカの渡り全国ネットワーク

<http://www.gix.or.jp/~norik/hawknet/hawknet0.html>

2024年秋期 データ



峠を超えるハチクマ

庭田山頂公園 タカの渡り (2024年)

日付	天候	時間	サシバ	ハチクマ	ツミ	ノスリ	トビ	クマタカ	ハヤブサ	その他	計
9/11(水)	晴	14:00～16:00		1							1
9/17(火)	晴	10:00～13:45	1				6	1		不明8	16
9/23(月)	晴	10:20～15:00	6	33			3	1	1	不明6	50
9/24(火)	晴	13:20～15:40	2	8	1	3	4				18
9/25(水)	晴	11:45～15:15	41	14		3	7	1		オオタカ1、不明13	80
9/26(木)	晴	10:45～15:00	7	6	1	6	5	1	1	ミサゴ1、不明12	40
9/27(金)	晴	11:20～15:00		7		4		1			12
10/1(火)	晴	11:30～15:00	14	6		4	3			不明1	28
10/2(水)	晴	11:30～14:00	14	1		6				ハイタカ1	22
合計			85	76	2	26	28	5	2	43	267

探鳥会：9/23

(観察者：笹間 俊秋)

9月5日に観察へ行きましたがタカは全く飛ばず。中旬になりようやく飛ぶものの、例年よりかなり少ない状況でした。9月22日深夜に雨が降り気温が下がったことにより、翌日から飛び始めて24日早朝から一斉に渡り始めました。残念ながらその日は用事があり午後からの観察でしたのでカウントできませんでした。午前中に観察していた方の話ではこの秋最大の羽数が飛んだとのこと。そして25日も多数が渡って行きました。

伊勢やすらぎ公園 タカの渡り (2024年)

日付	天候	時間	サシバ	ハチクマ	ツミ	ノスリ	その他	計
10/1(火)	快晴	07:50～11:05	54			1	トビ1	56
10/2(水)	快晴	07:40～11:00	24			3		27
10/5(土)	曇	07:00～12:00	14			1		15
10/6(日)	曇	07:00～10:30			2		チゴハヤブサ1	3
10/7(月)	曇	07:40～10:45	10	2			トビ1	13
10/8(火)	雨のち曇	07:55～09:45						0
10/10(木)	曇	07:30～11:00	96				ミサゴ1	97
10/11(金)	曇～晴	07:40～11:00	125	2	1	2	ミサゴ1	131
10/12(土)	快晴	07:30～10:00	30					30
合計			353	4	3	7	5	372

探鳥会：10/5、10/6

(観察者：中西 章、濱屋 勝則、濱口 雅也、西村 泉 他)

今シーズンのピークは、10月10日、11日でした。関東方面で大雨が続いていましたが、天候が回復したことにより足止めされていたタカが一気に飛来したのではないかと思います。久々にタカ柱も数回観察できました。

背割り堤のオオハヤブサ



桑名市 横山 真一

「しろちどり第 120 号」に掲載された山本山のオオワシの記事を拝読した。1998 年に成鳥で初認されて推定年齢 32 歳以上と言われるその長寿もさることながら、同じ個体を 26 年の長期間にわたって観察できていることに畏敬の念を禁じ得ない。

このオオワシほど長期間ではないけど、長良川と木曾川を隔てる背割り堤に 7 年連続でオオハヤブサが飛来して越冬した。

背割り堤について

背割り堤は愛知・岐阜の県境になっており、三重・岐阜の県境の揖斐川とは隣接するので野鳥観察のフィールドとしてはほぼ同じエリアになる。この一帯で越冬するカモを中心とした水鳥や小鳥たちは多く「野鳥の会三重」の主催で毎年冬に「木曾三川探鳥会」も開催されている。観察範囲は愛知県愛西市の東海広場から岐阜県海津市の東海大橋間の約 9 km 区間で、車の通行が規制されているため自然環境が良好に保たれていて小鳥を狙う猛禽との出会いも多い。少数ではあるがコハクチョウの自然状態での定期的な越冬地となっていたことからこの地で探鳥を始め、20 年ほどの間に 150 種類の野鳥を観察した。

オオハヤブサとの出会い

オオハヤブサとの最初の出会いは 2016 年 12 月 12 日であった。堤防上を探鳥のためゆっくり車を走らせていた時、すぐ目の前に止まっているハヤブサに気付いて車を停めた。頭から顔を覆っている黒い羽がこれまで見てきたハヤブサと違ってすっぽりと顔を覆っている。その異様さに驚きながらもオオハヤブサだと直感して写真を撮り始めたけど近付きすぎていたようで飛ばれてしまった。

その後、まだいるのか気になったので 2 日後に行ってみたら川沿いのとても良い場所にとまっていた。また飛ばれないか気にしながら写真を撮ったけど特に警戒する様子は無く、この地が気に入ったようでそのまま居ついてしまった。

このハヤブサがオオハヤブサか普通のハヤブサか賛否両論が出たけどやがてオオハヤブサという



2016.12.12



2016.12.14

ことで落ち着き、情報が広まって人が集まるようになるにつれて警戒心が強まっていった。アラスカ南部からアリューシャン列島周辺に分布するオオハヤブサは稀な冬鳥として日本でも記録があり、このオオハヤブサは愛西市と背割り堤を行き来しながら一冬過ごして 4 月上旬にこの地を離れていった。



2017.12.04



2404.04.18

2年目

翌2017年の秋、11月下旬に友人から「今年も来ている」と連絡を貰って12月4日に再会した。前年、このオオハヤブサを初めて見た時、ネットで検索したオオハヤブサの写真と比べて胸の縞模様が細いなど感じた。今年は太くなって戻ってきたのかまずチェックしてみたけど変わっておらず、外見や行動から同一個体と断定。背中の羽の羽縁の様子が変わっていなかったことから初飛来から成鳥でやってきたことがわかった。また、縞模様が細いのはメスと判断し、野鳥界では著名な方に見てもらったらやはりメスとのことであった。

この2年目の冬はさらに噂が広まって人が集まるようになり、それにつれて警戒心が強まっていった。

継続しての飛来

その後、10月上中旬ころに到着して一冬過ごし、4月上中旬に繁殖地に帰って行くパターンで飛来は続いた。成鳥でやってきたので年齢が気になりだしたのは2022年頃からだ。自然界でのハヤブサの寿命は12～15年くらいと言われており、成熟するまで2年かかるとされている。2016年の初飛来から6年経っているのだから正確な年齢は判らないとしても少なくとも8歳以上になっている。それでも2022年の秋にも元気な姿を見せてくれ、わずかに残っている松林の南端近くのお気に入りの枝に止まってよく休んでいた。見晴らしが良いので狩りを行うのに都合が良かったのだろう。

狩りは早朝に行われるようで狩りや食事の場面は見られなかったがソノウが膨らんでいるのはよく見た。その頃には観察者が少なくなって私たちにもすっかり慣れ、行けば必ずいるわけでは無かったけど出会いが多くなってたくさんの写真を撮らせてくれた。

オオハヤブサとの別れ

2023年の春は4月18日にもまだ残っており、この時が元気な姿を見る最後になるとは思いもせずたくさんの写真を撮った。2023年の秋は10月14日に愛西市の電波塔に飛来しているのを確認した。今年も元気で来てくれたのを喜んだけど、よく見たら水浴びの後のように羽が乱れていて異変を感じた。その2日後に同じ場所に止まっているのを見たのが最後になった。一冬日撃情報が無かったので落鳥した可能性が有る。7シーズン8年間にわたる越冬であった。今年も秋の飛来の時期になった。元気な姿で戻っているのを願いながら最後の姿を見た電波塔にしばしば確かめに行っている。

なお、背割り堤の木曾川右岸は1家族もしくは2家族のコハクチョウの家族が2012年まで毎年定期的に越冬していた。自然状態で越冬する南限地として琵琶湖南部と並んで貴重な地であったが、2013年以降は上流部でコハクチョウを守る会が給餌を始めたことから途絶えてしまった。そのコハクチョウの4羽のファミリーが2023年の秋から2024年の春にかけて1羽のマガンと1羽のヒシクイと共に越冬した。この秋にも越冬の家族が来てくれれば南限地復活となるので期待している。

オオハヤブサについて (編集部)

この記事のオオハヤブサはハヤブサ (*Falco peregrinus*) の国内で観察される亜種のうちの亜種オオハヤブサ (*F.p. pealei*) であると思われる。一般に見られるハヤブサは亜種ハヤブサ (*F.p. japonensis*) であり、この他に亜種シマハヤブサ (*F.p. furuittii*)、亜種アメリカハヤブサ (*F.p. anatum*) などがある。